

SSR科のSランク

LUCAリオ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

超能力を使う武偵のことを超偵という。

数は決して多くないこの超偵だが、東京武偵校には1人Sランクの超偵がいた。

彼の名前は神原 悠。

ラノベやアニメ好きのライトオタクであるのにも関わらず欲の少ない謙虚な少年である。

これはイーウーと戦い、戦役を勝ち抜いていく彼の軌跡である。

目次

第3話	第2話	第1話
9	5	1

第1話

目が覚めると超能力が使えるようになっていた。

待って待って、気が狂ってしまったわけではない。信じられないようなことだが本当の話なんだ。

指先から電気がパチパチと起きている。試しに触れてみると痺れたりしない。恐る恐る壁に指を押し当てるとバチツと音がして、壁が少し焦げてしまった。

電気を出しているのと疲れるが、なんだかまだまだいけそうな気がする。

……それにしてもなぜいきなり超能力が使えるようになったのだろうか。こんなことできる人類は恐らく俺しかいないだろう。もしかしたら実験とかに使われるんじゃないかと思うととても恐ろしい。

取り合えず親に相談してみようとリビングへ行く。

「お母さん、朝起きたら指から電気出せるようになってた」

「もう馬鹿なこと言っちゃんとがっどええええ」

目の前で指から電気を出したらやはり驚いた。

まあ当然だよな。

「へーすごいなあ。それ超能力やろ！ 武偵になれるやん！ どうする？ 来年武偵高行く？」

……もつとビックリするものだと思つてたらあんまり驚かなかつた。

あとなんか不穏な言葉も聞こえた。

武偵……？

どこかで聞いたことがある。

ラノベの緋弾のアリアで聞いたことがある。

へ？

ここは東京武偵局超能力研究所。さっそくやって来た。

超能力を使うことができる超偵志望の生徒はここで推薦書と願書をもらわなければいけないらしい。

超能力はこの世界でも大変希少であり、自称超能力者とかも後を経たないため、きちんとここで確実に超能力者であると認可されなければいけないようだ。

ちなみに後だしになったがなんか俺は若返っていた。

昨日までは大学生だったのに今は中三らしい。

いや何でだよ。

……そしてもう吹っ切れた。

目が覚めてから何回も何回も驚かされるようなことがあつてよう……もうどうにでもなりやがれ！

こちらら原作も読破してるんじやイーウーも戦役も戦いぬいてやるよ！

あと理子好きだー！

欠片も望んでいなかったとはいえ、緋弾のアリアの世界に来たんだ。

こうなりやヒロインの1人くらいとは付き合つてやる。

あと能力はせっかくの電気なんだから漫画知識とかで技とかパクつてやる！

そして俺は超能力者である認可をもらい、G19という評価をもらった。

これはなかなか凄いらしい。ビックリされた。実験に付き合ってくれたら武器とかをただであげると言われた。

銃とか弾とか金がかかるらしいし、非人道的な実験はしないと云つていたため快く申し出に乗った。

原作知識があるとはいっても俺は昨日まではずぶの戦闘の素人だ。

とりあえず入試と入学までの間に身体を鍛えたり、精神をすり減らして超能力を使いまくって慣れたりしなければ。

タイムリミットの入試まではあと3ヶ月、入学までは6ヶ月。

頑張ろうと思う。

第2話

東京武偵高に入学するまでの訓練が大変素晴らしいものだった。4月までの6ヶ月の間に何があつたのかを簡単にではあるが言いたいと思う。

俺のスポンサーになってくれることになった東京武偵局超能力研究所が貴重な能力を持つ俺が拐われたり死んだりしないように鍛える場所と教官を用意してくれると言い出したのだ。

さらにもう入試は受けなくてもいいようだ。

なんか推薦してくれたらしく免除になったらしい。

まあそれでも俺はその話に飛びつき6ヶ月の間、そこで寝泊まりすることになった。

教官は東京武偵局、元公安零課 服部 絶蔵さんだった。現役はすでに退いているのだが、その絶技には何度驚いたのかわからない。

絶蔵さんは現役時に『暗殺者』の二つ名を持った凄腕であり、俺は絶蔵さんからとりあえずの格闘訓練を指導してもらった。

何故だかは知らないが、俺は絶蔵さんの技を覚えるには大変相性がよく、さらに個人

的にも気に入ってもらったためいくつか秘奥を教えてもらうことになった。

一つは肉体操作である。

絶蔵さんの使う暗殺術では武器が邪魔になるため素手で相手を殺害しなければならぬ。そんなときに身体を凶器へと作り替える技らしい。

一つは歩法である。

暗殺術では相手に気づかせないことが重要であるために音を消して歩くことが重要であるのだ。

一つは耐性を持つことである。

毒や電撃、拷問などに耐えるための身体造りである。

これらの3つを俺は会得した。

肉体操作が手しか出来ないため完全とは言いがたいが、それでも絶蔵さん曰く、暗殺の天才であるらしい。

ぶつちぎりで褒めてくれて嬉しかった。

けど殺しが許されてるのはあくまで公安零課であって武偵は殺しダメなんだよね……。

超能力の方でもかなりの進歩があった。

研究所の人達が俺の超能力について調べてくれたり、超能力と組み合わせる武

器をわざわざ作ってくれたのだ。

どうやら俺の超能力は電気を出すことではなく、電気を貯めることにあるらしい。

それもコンセントとかから充電できるだけじゃなく、空気中からも微弱ではあるが充電できるのだ。

初めて超能力が発現したときに電気を放出できたのはこれが要因だったようである。

超能力が発現したばかりであるため、貯められる容量はまだ正確には決まっていない状態らしく、今のうちに能力を鍛えることで貯められる容量も増えるということなので、俺は電気を貯めては放出し、貯めては放出しを繰り返した。

そのため、俺のGは19から27まで増えるという驚異的な伸びを見せ、研究所の人達を驚かせた。

武器の方だが、15キロあるらしいヨーヨーをもらった。

特殊な素材で出来ているため電気も通すらしい。

ただかなり重いいため絶蔵さんによる修行によってなんとか使えるようになった。

最後に俺自身で開発した超能力の技の方にも発展があった。

最初に電気と聞いて禁書目録を思い出した俺は超電磁砲を撃てるように頑張ったが、まったくできず、断念した。

次に思い付いたハンターハンターが思いの外上手くいった。

こうして俺は血の滲むような色濃い6ヶ月を過ごして、ここ東京武偵高にいたのである。

……………それにしても俺ほぼキルアじゃね？

第3話

峰理子とはある存在に対して興味を持っていた。

元々はとある筋からの情報でたまたま耳にしたものだが、それは余りにも突拍子もない情報であった。

曰く、その者は入試を免除されている。

曰く、その者は武偵局直々に推薦され、鍛えられた存在である。

曰く、その者はSSR科という他の科に比べてSランク生が圧倒的に少ない科なのも関わらずSランクである。(これに関してはSSR科自体の特殊性により、そもそも母体数が少ないという理由もあるのだが)

ここまではそれなりの情報通ならば手に入れることのできるもの、これでも充分凄まじいが理子の気を引いたのはこの続きだ。

曰く、その者のGはたったの半年で8も上昇したということ。

曰く、彼は半年前まではただの一般人であったこと。

曰く、彼はあの服部絶蔵に師事し、たぐいまれなる才を發揮し暗殺技術を教えられた

ということ。それも半年でだ。

改めて情報を頭の中で反芻させても到底信じがたい。

だが、理子には信じないという選択肢はなかった。

それはひとえに理子がイ・ウーに所属していたからである。

イ・ウーにはそれこそ人外ばかりであった。

それこそこの情報の人物よりもさらにだ。

どういつもこいつも人間ではないようなものばかり、まあ実際に化物もいたのだが。

だからこそ理子は神原　悠という少年の情報は間違えではないと考えている。

「まあそれにしてもチートだよねー♪」

だからこそ、今日の入学式は楽しみである。

アイツに囚われている限り自分には永遠に自由は訪れない。

期待も希望もそこそこにしか持たない。それがうまくいかなかったときの絶望を

しているからだ。

けれども、もしも件の人物がアイツを倒す可能性があるのなら

「利用しない手はないよね〜♪　理子のために頑張ってくれるよね？」

ん♪」

ゆ・う・く・

神原 悠

どうも、神原 悠です。

ようやく名前が判明しました。

俺はとてつもないほど悩んでいた。

それは、俺って完全なキルア劣化版じゃないのかということだ。

超能力にしろ武器にしろ暗殺技術にしろ才能にしろだ。

幸いこの世界にはハンターハンターの漫画がないため、他人に「あれ？
アじゃね。外見とか全然違うけど」とか思われる心配はない。 アイツキル

だが、俺はもう俺という存在を見失いそうになっていた。

だってキルアだもん。

……中途半端にな

ここまでキルアの要素があるのにも関わらず俺は名前も外見も全然キルアじゃないのだ。

髪の色だって栗色だし、名前もキルア要素がない。

完全に中途半端なのだ。

キルアのエッセンスを詰め込んだ別人。

俺はもう神原 悠でもキルアでもない中途半端な存在なのだと思っていた。

まああくまで過去形なんだからね！

いいことあったからもうどうでもよくなったよ！

なんかさ、俺、あの理子りんに一目惚れされちゃったみたいなんだ。

今日入学式だったんだけど、たまたま学校の行き道で理子りんに出会ってさ、なんか顔真っ赤にしながら一目惚れました、付き合ってくださいって言われた。

それがすっごく嬉しくってさ、ヤバイよな！

いきなり原作キャラから惚れられるなんてさ。

理子は原作の中じゃ小悪魔キャラだけど、こういう一面もあつたんだな。

嘘っぽい感じもしなかったし、きつとあれ本心からだよな！

まさかまだ入学式も済ませてないのに、彼女できるなんてな。

なんか色々あつた悩み（なんで武偵やのに暗殺技術習いまくってるんだよとか）も吹っ切れた！

あれ？　俺ってけっこう単純？